“人と出会い、地域医療を考えた 20 年”

矢掛町国民健康保険病院　村上正和

20 年続いた地域医療部会への思いを、少し振り返ってみました。この部会に参加して一番良かったことは、やはり、実際に地域医療を担っている多くの方々と知り合い、さまざまな考え方に触れることができたことです。本当にありがたく、感謝しています。

もう一つ良かったのは、自分の弱音を吐くことができ、それに対して皆さんから助言をいただけたことです。それぞれ立場は違っていても、地域医療の中で同じような問題を抱え、「この苦境をどう乗り越えていくか」を一緒に考えることができました。「傷をなめ合う」というより、皆さんの話を聞くことで、「もう少し頑張ってみよう」と勇気をもらえる会だったように思います。

2006 年 4 月、私は矢掛病院に副院長として赴任しました。私がこの会に参加するようになったきっかけは、赴任して比較的早い時期に、NPO 岡山医師研修支援機構の病院紹介の会場で、遠藤先生から「こんな会があるんだよ」と教えていただき、誘っていただいたことだったと思います。地域医療の現場で迷ったり、困ったりすることが多かっただけに、大学病院の中会議室や小会議室に集まり、皆さんの顔を見ながら話を聞くことが楽しみになりました。いろいろな意見を聞くことで、自分にはなかった考え方を知り、目の前の困難にもう一度向き合う勇気をもらっていたように思います。

今でもよく覚えているのが、小豆島の故・三宅先生のお話です。「土庄病院では救急車を全部受けるのが当たり前だ」と言われたことに、当時の私は大変驚きました。その頃は、専門外の病気やけがの救急患者をどこまで受け入れるべきか、受け入れた後にどう対応すればよいのか迷うことが多く、病院として救急を断ることもありました。しかし、三宅先生の言葉を聞いて、「専門外だからどうするか」ではなく、「地域の病院として地域を引き受ける」という考え方があるのだと気づかされました。今から振り返ると、この言葉との出会いは、私自身の地域医療に対する考え方を変えた原点の一つだったように思います。

部会が始まった頃は、「地域医療崩壊」「医療崩壊」という言葉が盛んに使われていました。地域で働く医師も少なく、「これから地域医療はどうなっていくのだろう」と、皆が不安を抱えていた時代だったと思います。岡村一心堂病院の故・岡村先生の発想力と行動力にも驚かされました。「パニック値」という言葉を初めて聞いたのも、この頃でした。

ちょうど新しい臨床研修制度が始まった時期でもありました。NPO の集まりなどを通じて、若い医師に地域へ来てもらうためには、自分たちから地域医療の魅力を発信しなければならないと考え、いろいろなことに取り組んでいたように思います。

その後、金田先生のご尽力もあり、医療関係者だけでなく、行政や法律の専門家など、さまざまな立場の方々が参加する大きな会になりました。定期的に顔を合わせることで、多くの情報や助言をいただきました。「自分たちだけが困っているのではない」と知り、また頑張ろうという勇気をもらいました。この部会は、2006 年に中小病院が集まって勉強や協議をする場をつくろうという発想から始まり、間もなく「地域医療病院部会」と名付けられました。その後、参加するメンバーが増える中で「地域医療部会」と名称を変え、活動の幅も

さらに広がっていきました。金田先生が 2011 年に岡山県医師会報へ寄稿された文章を見ると、当時すでに第 53 回を数え、医療関係者だけでなく、行政、法律、自治体など、さまざまな立場の方々が参加する会へと広がっていたことがわかります。金田先生の名司会はもちろんですが、コロナ禍では、岡村先生が Web を活用し、この会を途切れさせることなく継続させてくださいました。また、森下先生には毎回部会の記録をまとめていただきました。本当にありがとうございました。

私自身、この会から多くのものを得ることができました。本当に心強かったです。これからも少しでも地域医療や部会の皆様に役立ちそうな情報や、自分が経験したこと、そこから考えたこと、ちょっとほっとするようなことや、元気が出るようなエピソードなどを、皆さんと共に発信していきたいと思っています。そして、この部会の良さがこれまでのように続いていって欲しいと思います。

20 年間を振り返って改めて思うのは、この会は単に情報を得るための会ではなかったということです。人と出会い、自分とは違う考え方を知り、困ったときには支えてもらい、そして地域医療にもう一度向き合う勇気をもらう場でした。

20 年間、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。